

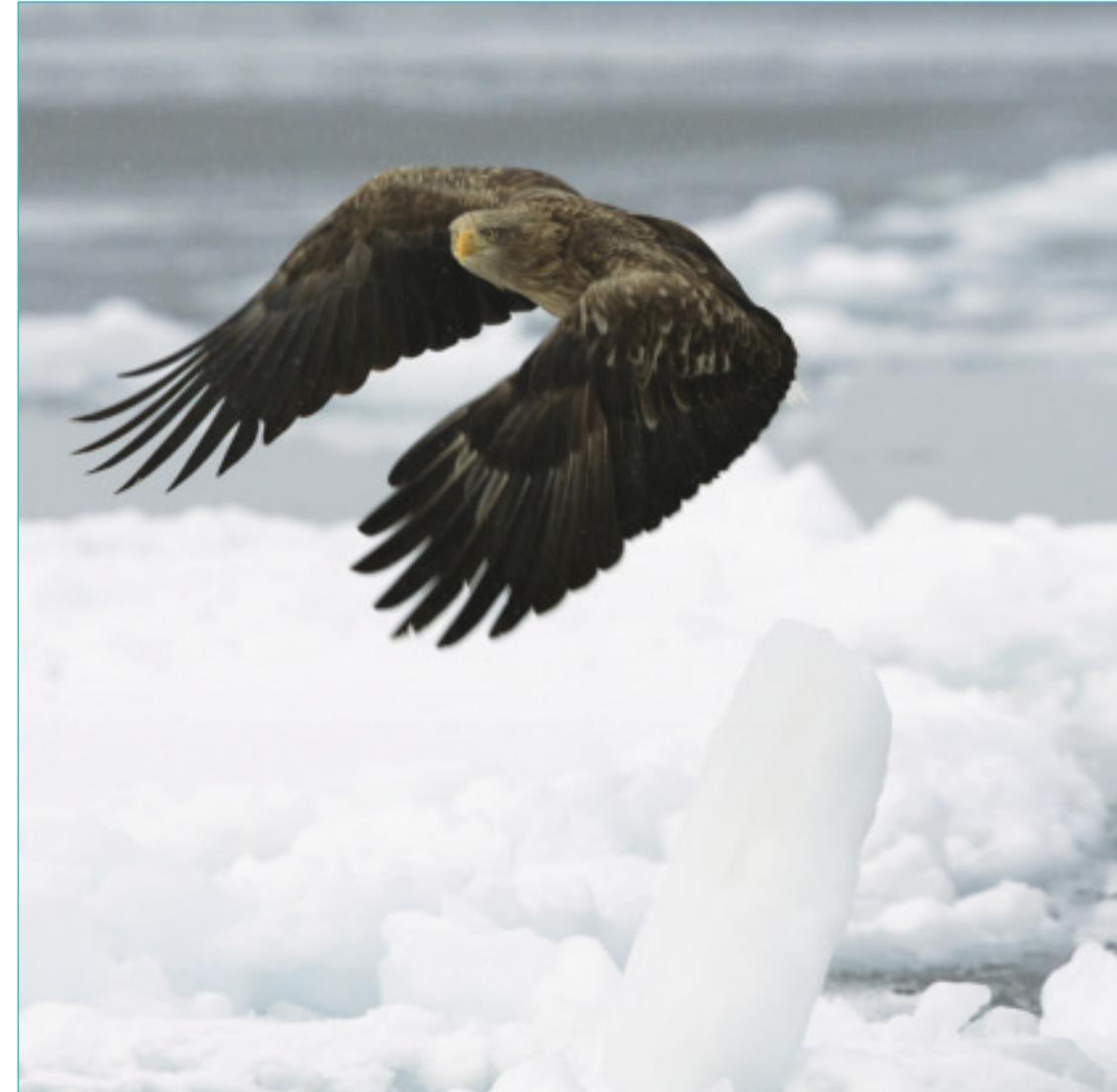
PHOTO MESSAGE 2008

二〇〇四年の早春、氷の海上に何度も船を出した。そして出合ったのはクラカケアザラシの赤ちゃん。地元の漁師でさえ、めったに見ないという。海をさまで、やがて解けて消える氷の上で誕生した命。この星には神秘と美しさが満ちあふれ、それが無限であることをつくづく思う。

その翌年から三年続けて、南下する流水は極端に貧弱となつた。もちろんアザラシの赤ちゃんに会うこととはかなわない。

オホーツクの流水は確実に縮小している。北海道にはまずまずの量が押し寄せた今年だが、オホーツク海全体では平年の面積には及ばなかつた。流水の縮小がさらには進むとアイスアルジが減少し、それはオキアミの減少にも直結する。もちろん漁業への影響も避けられない。

縮小する流水



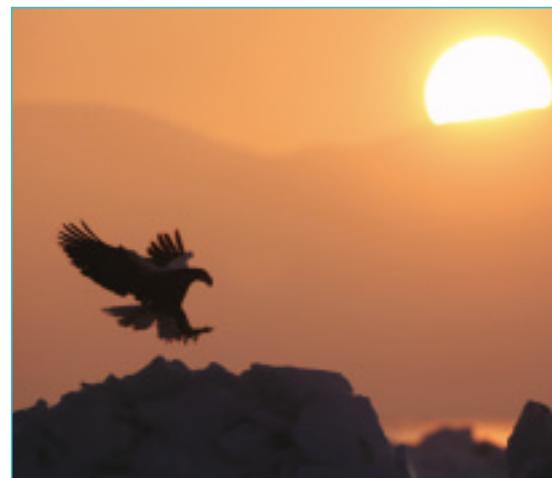
獲物を追ってやって来るオジロワシ



凍ったばかりのシャーベット状の海水は「泥のような氷」という意味で「氷泥(ひょうでい)」と呼ばれる



クラカケアザラシ



オオワシ

忍び寄る温暖化の危機

北海道のオホーツク海は、北半球で最も南で流水が見られる場所だ。千島列島が海を湖のように閉ざし、そこアムール川から大量の真水が注ぎ込むなど、いくつかの条件が整うことではじめて凍る。重要なのは大陸から吹き出す寒気であり、ほんの数度の温暖化で北海道に流水が来なくなるという。

流水は温暖化を計るセンサーだ。縮小傾向の流水は、わたしたちが地球上で生き続ける上での大機会を警告している。わたしたちの消費や欲望がこの星の絶妙な仕組みを狂わし、それが何の罪もない生き物たちの命を奪い、わたしたち自身にも異常気象などとして危害が忍び寄る。

北海道の冬の厳しさ、流水の神秘を過去の記憶にしないことが、人の営みを守ることだと思う。